



ラームカムヘン大学日本語科におけるタイ日ダブルの学生にとっての  
日本語の意味 —タイ日ダブルの学生の一例—  
ความหมายและบทบาทของภาษาญี่ปุ่นตามทัศนะของนักศึกษาอุทกครั้งไทย-ญี่ปุ่นที่ศึกษา  
ในสาขาภาษาญี่ปุ่น มหาวิทยาลัยรามคำแหง -ตัวอย่างของนักศึกษาอุทกครั้งไทย-ญี่ปุ่น-

Ai Murasaki<sup>1</sup>

**Abstract**

In this article, author has investigated the attitudes toward expectations in learning Japanese language and the vital role of Japanese language teachers in the motivation and engagement of their half-Thai, half-Japanese students majoring in Japanese Studies at Ramkhamhaeng University. The main content of this article is based on students' unique personal background. The research methodology was carried out by narrative interview of their individual life stories. The data were collected through personal interviews and student biographical data.

The research revealed that it is not possible to conclude that in general, the half- Thai, half-Japanese student are able to communicate in Thai and Japanese fluently. It also showed that a student who have good conversational skill are eager to learn and practice using the language in order to build up their proficiency in Japanese language and Thai language.

**Keywords:** The half- Thai; half-Japanese students; Life story; Japanese communication

---

<sup>1</sup>Lecture, Japanese Section, Department of Thai and Oriental Languages, Faculty of Humanities,  
Ramkhamhaeng University E-mail: merosarch0211@yahoo.co.jp



### บทคัดย่อ

บทความนี้ผู้เขียนได้สำรวจและแลกเปลี่ยนความคิดเห็นเกี่ยวกับความคาดหวังในการเรียนวิชาภาษาญี่ปุ่น และบทบาทของอาจารย์ผู้สอนภาษาญี่ปุ่นที่จะช่วยส่งเสริมการศึกษาภาษาญี่ปุ่นให้กับนักศึกษาที่เป็นลูกครึ่งไทยญี่ปุ่น ซึ่งเป็นนักศึกษาที่กำลังศึกษาวิชาเอกภาษาญี่ปุ่น มหาวิทยาลัยรามคำแหง เนื้อหาของบทความนี้เกี่ยวข้องกับภูมิหลังของนักศึกษา โดยใช้ระเบียบวิธีการวิจัยแบบเล่าเรื่องชีวิตส่วนตัวบุคคล (life story) ผู้เขียนได้เก็บและรวบรวมข้อมูลจากการสัมภาษณ์ และจากเอกสารข้อมูลในแฟ้มชีวิตประวัติของนักศึกษา

จากการศึกษาพบว่า การที่ผู้สอนภาษาญี่ปุ่นคิดว่า “เพราะนักศึกษาเป็นลูกครึ่ง ก็น่าจะมีความรู้ทั้งภาษาญี่ปุ่นและภาษาไทยสามารถสื่อสารภาษาญี่ปุ่นและภาษาไทยได้ดี” นั้น เป็นสิ่งที่ไม่ถูกต้องเสมอไป นอกจากนี้ ยังพบว่า นักศึกษามหาวิทยาลัยรามคำแหงที่เป็นลูกครึ่งที่สามารถสื่อสารภาษาญี่ปุ่นได้อย่างคล่องแคล่วนั้น มีความมุ่งมั่นและตั้งใจในการเรียนภาษาญี่ปุ่นเป็นอย่างยิ่ง โดยมีเป้าหมายเพื่อพัฒนาความสามารถทางด้านภาษาญี่ปุ่นให้ดียิ่งขึ้นต่อไป

**คำสำคัญ:** ลูกครึ่งไทยญี่ปุ่น; เล่าเรื่องชีวิตส่วนตัวบุคคล; การสื่อสารภาษาญี่ปุ่น



## はじめに

ラームカムヘン大学に来て3年半が経ち、学生の中にタイ日ダブルの学生<sup>2</sup>が複数人在籍していることに気が付いた。彼らは日本語教育に何を求めてラームカムヘン大学の日本語専攻で勉強しているのか、日本人教師は彼らにどのような支援ができるのかを考えた時、彼らの背景を知る必要があると考えた。

そこで、タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会（以下 JMHERAT）<sup>3</sup>の運営委員として、バンコクの大学に在籍しているダブルの大学生を集め、同じような境遇だと思われる大学生同士で話をする場（通称：ダブルの大学生の会）を作り、彼らの背景にあるものを聞く機会を得られた。そこでは、各々の言語バイオグラフィ<sup>4</sup>を作成してもらい、どの時期がどのように大変だったのかを語ってもらった。大変だった時期は、主に日本からタイへの移動又はタイから日本への移動時で、大変だったことは親戚関係や進学先など様々であったが、共通していたのは「日本人なのに」「日本人だから」と周りからの決めつけに違和感を持っていた、ということであった。また、この会を通して「自分はすごく苦勞していると思っていたが、他の人の話を聞いて自分よりも苦勞している人がいることを知った」との声を聞くことができた。この日、ラームカムヘン大学からは女学生1名のみ参加であったが、私はこの学生の他にも個人的にラームカムヘン大学のダブルの学生から「日本からタイに来て、自分が何者であ

るのがわからなくなった。どうすればいいのだろうか」「自分は1人きりで孤独だと思う時がある」という相談を受けたことがある。もしかすると悩んでいる学生は他にもいるのではないかと、日本人教師にも何か力になれることがあるのではないかと思い、今回筆者のクラスに登録している学生にアンケートを取り、その内のタイ日ダブルの学生を対象にインタビューを行った。

この際の調査協力者は、8名のダブルの学生と1名のダブルの教師（内、男性5名、女性4名）である。様々な日本語能力を持つ彼らの内、本稿では、日本で育った経験があり、比較的筆者とすぐに連絡が取れる1名を挙げることにした。この調査対象者は筆者と知り合って1年以上が経ち、タイや日本での生活についての話をしたり相談を受ける等の関係を構築している者である。

## 調査方法

### 1. ライフストーリー研究法

現在タイで過ごすダブルの学生たちは、過去にどのような移動を経験しているのか、彼らと関わる人との言語はどのようなものなのか、大変だった時期に彼らが教師にどのようなことを必要としていたのかを知るために、ライフストーリー研究法を採用した。（川上、2014）

「ライフストーリー研究法」とは、語り手の経験や見方の意味を探求する、主観的世界の解釈を重視したもの（桜井、2005）であり、



本質主義的である「ライフストーリー研究法」とは別のもので、インタビューを語り手と聞き手が構成したストーリーとして解釈することで、語り手の主観とその社会的構成を明らかにする研究手法である（三代、2014）。社会学を中心に発展したライフストーリー研究法であるが、日本語教育におけるライフストーリーは、1990年代から見え始め、2000年代後半以降活発に研究されてきた。

以前から「タイ人とは」「日本人とは」との量的研究に疑問を抱いていたので、質的研究を行いたいと思った時、JMHERATによるダブルの大学生の会で行ったライフストーリー研究法を自分自身でも試みた次第である。

## 2. ラームカムヘン大学の学生を対象とするにあたり

ラームカムヘン大学の学生は仕事と両立しながら通っているため、試験期間にのみ大学へ来るといふ学生がほとんどである。そのため、調査の機会は多くて年に5回しかない。また、ダブルの学生は3年ほどで卒業する学生も多く、その機会はなかなか得難い。実際、インタビューを行った学生8名の内5名は今学期（S/59）<sup>5</sup>までに卒業してしまった。そのような学生のインタビューについては、直接会うことが難しい場合、SNSを利用した追加インタビューを行っている。

調査の流れは、まず言語バイオグラフィを作成してもらい、その後、大変だった時期を語

ってもらい、そして、更に言語ポートレート<sup>6</sup>を作成してもらうことで、現在、自分の体のどの部分にどの言語が存在しているのかを教してもらった。また、インタビューの録音が間に合わなかった部分や後日SNSでのメッセージのやり取りで聞いたことについてはフィールドノートとしてまとめた。

## 3. 調査対象者：Sさん

Sさんに対し、2016年10月と2017年5月に2度のインタビューを行い、大変だった時期について語ってもらった。大変だった時期とはどのような出来事が起きた時期だったのか、それを乗り越えるためにどのようなことをしたのか、学校での問題に関しては教師にどのように対応してもらい、本当はどのように対応してもらいたかったのかを中心に話してもらった。また、ラームカムヘン大学で日本語を学ぶ意味と目的を尋ねた。

移動が分かりやすいように言語バイオグラフィを、現在の自分の言語との関係を客観的に見るために言語ポートレートを作成してもらったので、参考にしてもらいたい。

## ラームカムヘン大学日本語科在籍中のダブルの学生Sさんの語り

### 1. Sさんの背景

Sさん：日本人の父、タイ人の母を持つ。タイで生まれ、3歳の時に日本へ移動、中学入学時に自らの意志で母と3人の兄弟と共にタイ



東北部ウボンラチャターニー県へ移動。高校卒業後7ヵ月間、日本の知り合いの蕎麦屋で住込みのアルバイトをし、またタイに戻ってきた。タイと日本の中で4度の移動を経験し

ている。現在、結婚し子どもが1人いる。ご主人の家族と同居しており、家庭内言語は主にタイ語であるが、日本語、英語、ポルトガル語と多言語の中で生活している。

2. 言語バイオグラフィで見える使用言語の変移：大変だった時期

年	0才	3才～小6	中1～前大 <sup>20歳</sup>	大1～今	現在(21才)
場所	タイ	日本	タイ	日本(山梨県 <sup>山梨県</sup> )	タイ
父		日本語	日本語	日本語	日本語
母		日本語	日本語	タイ語	タイ語
兄弟 (弟・妹・弟) <sub>1才下 3才下 3才下</sub>	弟1	日本語	日本語	タイ語(少し)	日本語
	妹	日本語	日本語	タイ語	タイ語
	弟2	日本語	日本語	タイ語	タイ語
学校		日本語	日本語 英語	——	タイ語
友人		日本語	タイ語	——	タイ語 日本語
外(職場)	タイ	日本語	タイ語	日本語	タイ語
情報		日本語	タイ語	日本語	タイ語 日本語
おじ 親戚			タイ語	日本語 旦那、タイ語	タイ語(2人他) 日本語(1人)

Sさんの最大の転機は、中学入学と同時にタイへ移動した時である。母親が祖母の介護のためにタイへ帰国することになった際、両親にタイへ行きたいかどうかを尋ねられ、日本にうんざりしていたのと、厳しい父の下から離れた

いとの思いで、自らタイ行きを選んだ。

親に従い移動する子どもが多い中、自ら移動を選んだSさん。「日本にうんざりしていた」ことについて、Sさんは以下のように述べている。



2 = 第2回調査、\* = 筆者、S = 調査協力者、数字 = 通し番号

2\*2 前に言ってた「最初に日本からタイに来たのは自分で決めた」理由は、日本にうんざりしてたからって言ってたような気がするんだけど、どんなことにうんざりしてた？

2S1 そうです。タイの方が自由に暮らせるかなって。あんまり周りを気にしないで友達関係とかでストレス感じないと思ってました。小6の時に中学生の女不良になるように誘われて…断れる勇気ないなって思っていました。

2S2 覚えてるのは大体こんなかんじで。

2\*3 女不良!?

2S3 そうです。あと幼なじみの子も違う県に引っ越したので

2\*4 なるほど!

Sさん自身に何らかの問題があったというよりも、「タイの方が自由に暮らせるかなって。あんまり周りを気にしないで友達関係とかでストレス感じないと思ってました。」(2S1)というように日本での友人関係がSさんを「うんざり」させたと見える。この「うんざり」から解放されるために来タイを決意した。

謂わば「逃げ」である。

来タイ後、本格的にタイ語の世界に入り、中学入学前の1ヵ月半ほど3ヵ所ものタイ語の塾に通いタイ語の勉強をしたという。しかし、Sさんの性格上、その時のタイ語習得は難しいものだったと語る。



1 = 第1回調査、\* = 筆者、S = 調査協力者、数字 = 通し番号

1 S 1 1 なんだろう、あんま。最初英語が好きだった、小学生の時に。でもなんか、学校でなんか教えてる英語は好きじゃないから。それ以来なんか、あんま、好きじゃなくなったっていうか。ま、普通に外国人の人と話すのは好きだけど、学校で勉強する英語はあんま好きじゃない。 ふふふふ

1 \* 1 3 面倒くさい、疲れてたってこと？疲れてるってこと？

1 S 1 2 あーもう勉強が

1 \* 1 4 勉強で、ことばに対して？言葉を覚えるとかが？

1 S 1 3 こ、んー今、なんかポルトガル語あるんですけど、家で。それで覚えるのは好きなんですよ。でも、なんか学校とかで覚えるのはあんま好きじゃないんですよ。なんかそういうシステムみたいなものが好きじゃない。

1 \* 1 5 言語の勉強が嫌なんだ・・・

1 S 1 4 日本語は好きなんですけど

1 \* 1 6 タイ語を勉強する前、勉強した？したんだよね？

1 S 1 5 したした

1 \* 1 7 それは必死でしたんだよね、きっと。

1 S 1 6 そう、3カ所くらい塾行かされて。毎日…

1 \* 1 8 毎日！？

1 S 1 7 そう、毎日。でも、全然上達しなくて。結局は、学校行って友達とかと話してるうちに。あとHi 5とかで。それでめっちゃなんかあの、書くのができるようになった。

1 \* 1 9 ふーん、そこで覚えたんだ？これって中学生の時？来たばかりの時だったの？中2か。その時にもうがつつり3カ所（塾に）行ってたの？

1 S 1 8 そう、中学1年生の 때가3カ所。それから何カ所か減ってって。

1 \* 2 0 あ、徐々に減ってったんだ？もう全部行かないとかじゃなかったんだ？

1 S 1 9 そう嫌いなところから減らしていって。



「学校で勉強する英語はあんま好きじゃない。」(1S11)「学校とかで覚えるのはあんま好きじゃないんですよ。なんかそういうシステムみたいなものが好きじゃない。」(1S13)「学校行って友達とかと話してるうちに。あとHi5とかで。それでめっちゃなんかあの、書くのができるようになった。」(1S17)から分かるように、Sさんは教師との勉強による言

語習得は不得意で、自然習得が自分に合っていると分析している。そのため、いくら塾に通ったところでタイ語の上達には繋がらなかったようだ。

大変だったと答えた時期は中学2・3年生の時で、タイ語が分かるようになってきた時期である。タイ語が分からず四苦八苦していた時期ではない。この時のことをフィールドノートにまとめた。

① 大変だったこと	日本語の試験の際、クラスメイトにカンニングをされることに対しての嫌悪感があった。また、答えを教えなかったら「なんで教えてくれないの？自分だけいい点が取れたらいいでしょ？」と裏切り者のような扱いをされた
② 教師の対応	1人だけクラスメイトとは別に、先に試験を受けさせた。
③ 教師の対応に対して感じたこと	教師がそう決めたことであるし、内心ホッとした。他生徒からの視線を浴びずに済んで良かった。何も考えずに試験ができた。

タイで中学校に入ることになった時、最初は幼稚園時代に通っていた幼稚園から高校まであるキリスト教の学校に戻ろうとしていたけれど、日本人教師がいるということで公立中高等学校に入ることとなった。入学前は、母親から聞いた話からも日本人学校のような学

校だと思っていたが、いざ入ってみると日本語の授業が週に約1回あるだけの学校だった。日本語が分かる人が日本人教師1人だけだったので、時間があつたら日本人教師と日本での話やタイ人学生についての話をしていたという。

④ 教師への要望	普通のタイ人と同じ扱いはしてほしくなかった。  例えば、タイ語が分からないのにタイ語を読ませられたりしたのが辛かった。
----------	---





④ の語りから、タイ語ができて当たり前だとして接されていた様子が窺える。これは、「押し付けられた期待」(尾関・深澤・牛窪、2011)であり、この学校だけでなく、タイの他の学校でもあり得ることである。また、日本で学校へ入った外国人学生も同様の扱いを受けている可能性が考えられる。

しかし、Sさんはこのような状況でも友人を作り、SNSでタイ語能力を高めていった。タイ語の塾や学校ではあまりタイ語能力は伸びなかったが、人との会話の中で能力を高めていった。言語能力は、人との関わりの中で伸びていくものであることが窺える。

### 3. ラームカムヘン大学進学

Sさんは、高校卒業と同時に結婚した。結婚後、バンコクの御主人の家で同居することになるが、若さもあり一緒に住むのはまだ早いと考え、日本の知り合いの蕎麦屋で住込みのアルバイトをした。しかし、7ヶ月後、働いていた蕎麦屋の都合でアルバイトを辞め、タイに戻ってきた。その後すぐ、第1子をもうけて今に至る。ラームカムヘン大学に入学したのは妊娠前で、筆者と出会ったのはお腹が大きくなった頃の定期試験時(1/58)であった。

ラームカムヘン大学を選んだ理由は、アンケートで答えてもらったものを表にまとめた。

ラームカムヘン大学に入学した理由	日本語の主専攻ができたから
日本語科を選んだ理由	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 楽だから</li> <li>2. 本当は他の学科を選びたかったけど、タイ語がまだ十分じゃないのにタイ語で専門的な勉強は難しそうだったし、言葉が分からないことが面倒くさい</li> <li>3. 日本語が好きだし、勉強しやすい。また、日本語の復習もできるし、<u>レベルの高い教育(国語としての日本語)を受けたいと思った</u>から</li> </ol>

実際には、入学後妊娠、出産を経て子育てに専念することになったので、授業に出る機会

はまだない。日本語科を選んだ理由に関して、詳しく聞いてみると、



- 1 \* 1 前、日本語学科を選んだのは楽だからと言ってたけど、どうして楽しかったの？
- 1 S 1 あー他の、その、違う学科だと言葉も分からないのに、またその学科の難しさと両方あって、それが、嫌ってうかなんか。ちょっと楽したいっていう。
- 1 \* 2 でも、タイ語はけっこうできてたんじゃないの？
- 1 S 2 いや、なんか、聞いたり話したりするのは OK なんですけど、なんかたまーになんかそういう難しい言葉とか。
- 1 \* 3 でも、日本語も一緒じゃない？
- 1 S 3 うん、あ、日本語はまだなんか、今のレベルだったらまだ…OK かな。うん、だからまたどんどん難しくなってくけど、難しくなって、それで自分もまた一緒に勉強できる。ま、あんまタイ語は好きじゃないっていう。
- 1 \* 4 あー…
- 1 \* 5 なんで楽しかったの？
- 1 S 4 普通に面倒くさい
- 1 \* 6 もし日本にいたら違う？
- 1 S 5 日本にいたら、日本語学科は選ばなかったかも。
- 1 \* 7 本当は、日本にいたら何を選んでたと思う？
- 1 S 6 歴史とか…。
- 1 \* 8 歴史なの！？ へ～
- 1 S 7 日本の歴史です。世界の歴史はもう、世界の歴史、あんまタイの歴史とか好きじゃない。

「日本にいたら、日本語学科は選ばなかったかも。」(1 S 5) というように、言語能力のために理想の進路と現実の進路が大きく変わっていったことが分かった。

日本語を選んだ理由は、「違う学科だと言葉も分からないのに、またその学科の難しさと両方あって、それが、嫌ってうかなんか。ちょっと楽したいっていう。」(1 S 1) 「あんま

タイ語は好きじゃない」(1 S 3) からタイ語で大学レベルの勉強をすることへの自信のなさが窺える。

それでは、ラームカムヘン大学での日本語の勉強に何を望み、どのような進路を考えているのだろうか。日本国籍で日本語の名前を持つ学生が、大学で主専攻として日本語を学ぶ意味、目的とは何なのか、問いかけた。



1\*71 でもさ、これ戻るけど、日本語勉強してどうなる？日本語勉強しても、日本人だから日本語話せるの当たり前じゃんってならない？

1S68 あーんーでも、なんか、時々忘れてるから復習って感じで。たぶんずっと日本語話さなかったら日本語忘れてる。

1\*72 そうだよな。

1S69 うん、と思うし。だから、生活の中にまず日本語はある。

「レベルの高い教育（国語としての日本語）を受けたいと思った」（アンケート、日本語科を選んだ理由、3）「復習って感じで。」（1S68）と、外国語としての日本語というよりも日本の中学校、高校で学ぶような国語を学べると考えていたことが分かる。

4. Sさんにとってのタイ語と日本語とは  
では、タイで家庭を築き、普段もタイ語を中心に使っているSさんが復習してまでも日本語を維持していきたいというのはどのような意味があるのか見ていきたい。

1\*94 生活の中に日本語があった方がいいんだよね。どうして？忘れないように？

1S90 そう、忘れないように。自分がハーフだってことを。

1\*95 んーなんで忘れちゃダメなの？

1S91 そのまま。

1\*96 ずっとこっち（タイ）いるでしょ？タイでもいい。

1S92 多分、普通の人より得。

1\*97 あーどんなところ？

1S93 まあ、2ヵ国語が話せることとか、日本の文化知ってることも多分普通の人よりも得だと思う。それをなんか、それがなくなったらもったいない、って思っちゃう。

1\*98 でも、日本人でもタイ語めっちゃ上手な人いるやん？



- 1 S 9 4 はい
- 1 \* 9 9 国籍ってこともある？言語だけじゃないってことだよな？
- 1 S 9 5 あー
- 1 \* 1 0 0 どっぷり浸かれるもんね。んーでもタイ人と結婚したらどっぷり浸かれるっちゃ浸かれるけど。親戚がいるのは違うか。日本にも親戚いるし、タイにも親戚いるし。
- 1 S 9 6 そうそう
- 1 \* 1 0 1 安心ってこと？なんだっけ…キープじゃないけど。これは何のために？
- 1 S 9 7 自分の
- 1 \* 1 0 2 心の安定のため？
- 1 S 9 8 そうそうそう！**心の安定**
- 1 \* 1 0 3 ってことは、タイ語が話せる自分も大事なんだね
- 1 S 9 9 大事。日本語だけだったら無理
- 1 \* 1 0 4 ふーん
- 1 \* 1 0 5 なんでそう思うの？日本語じゃダメ、タイ語じゃダメ
- 1 S 1 0 0 それだったらなんか、ハーフじゃないのに2カ国語を話せる人とかもいるじゃないですか
- 1 \* 2 0 7 ね、心の安定のためって言ってたけどさ、それってさ、プライドってことかな？
- 1 S 2 0 0 いや、
- 1 \* 2 0 8 違うやつ？
- 1 S 2 0 1 ちょっと違う。なんか、ハーフとして
- 1 \* 2 0 9 なんか、拠り所よね。言葉が拠り所
- 1 S 2 0 2 それぐらい、**それぐらいしか自分の中で得意みたいなのが**
- 1 \* 2 1 0 自信、自信があるのが。タイ語も話せるし、日本語も話せるし…自信か。自分の自信。自分の自信を伸ばすためってこと？日本語学科にいるってことは。伸ばすっていうか、維持するためか
- 1 S 2 0 3 あーかも。



「忘れないように。自分がハーフだってことを。」(1 S 9 0) と、ダブルであることを肯定的に考え、誇りに思っていることが分かる。

現在、育児中の S さんは、家で日本のテレビを見る他、同居しているご主人の義理の弟(日本人)とたまに日本語を話す程度であるが、「2カ国語が話せることとか、日本の文化知ってることも多分普通の人よりも得だと思っ。それをなんか、それがなくなったらもったいない」(1 S 9 3) 「(タイと日本のどちらの文化も言

も理解できることは) 心の安定」(1 S 9 8)

「それぐらいしか自分の中で得意みたいなのが」(1 S 2 0 2) この語りから、大学で日本語を学ぶのは、自分の自信・心の安定を保つための日本語能力維持のためであり、また、タイ日ダブルであることを忘れないためである。そのために生活の中に日本語を取り入れていることが分かった。では、いつから言語ができることに自信を感じるようになったのか。以下のように答えている。

1 S 2 3 それをなんか、1週間くらい前にメ、メール、ラインで送ってもらったんですけど、一通り読んでみて、もう訳そうとも思わなくて、で、その当日の日に紙もらって、それで、読んで、そのままタイ語で通訳したんです。そしたら あ、なんかすごい楽しくて、通訳できるのが、そこで。もう読んですぐにタイ語にできたっていう

1 \* 2 6 英語からタイ語なの？

1 S 2 4 いや、日本語からタイ語。 日本語で書いてある紙を、もう読んでそのままタイ語にできたっていうのが、なんか自分の中ですごい

「あ、なんかすごい楽しくて、通訳できるのが、そこで。もう読んですぐにタイ語にできたっていう」(1 S 2 3) 「日本語で書いてある紙を、もう読んでそのままタイ語にできたっていうのが、なんか自分の中ですごい」(1 S 2 4) と、通訳をする機会があり、その時に特に準備

をせずとも通訳することができたことが日本語とタイ語どちらも分かる、できる、という自信に繋がったようだ。この時の話をする S さんの様子から、日本語もタイ語も両方理解できるということが S さんにとってどれほど大切なことなのか、喜びを感じられることなのかを窺えた。



5. ダブルだから日本語の勉強は楽なのか

ここまでSさんの遍歴を見てきたが、ではダブルの学生はタイ人の学生よりも楽しんでいるのだろうか。

タイに来たばかりの中学生の頃はタイ語の習得に苦勞していたが、現在ではどうなのか見ていきたい。

1 \* 2 1 3   ね、漢字とか忘れない？

1 S 2 0 5   忘れる。だから、なるべく  
なんかニュースとか読むようにしてる

1 \* 2 1 4   あ、そうか、パソコンでも  
読めるもんね

1 S 2 0 6   漢字が出てくる

1 \* 2 1 5   うんうん

「なるべくなんかニュースとか読むようにしてる」(1 S 2 0 5) や雑談の中で「家では日本のテレビをひいてずっと見ている」と話していることから、生活の中に意識的に日本語を取り入れていることが分かった。この日本語能力維持のための努力は、タイ人の学生と同じか又はそれ以上のものである。「たぶんずっと日本語話さなかったら日本語忘れてる。」(1 S 6 8) という発言からも、やはりどのような人にとっても言語能力の維持にはそれなりの努力が必要であることが分かる。ダブルだからといってタイ語や日本語の勉強が楽だということはない。

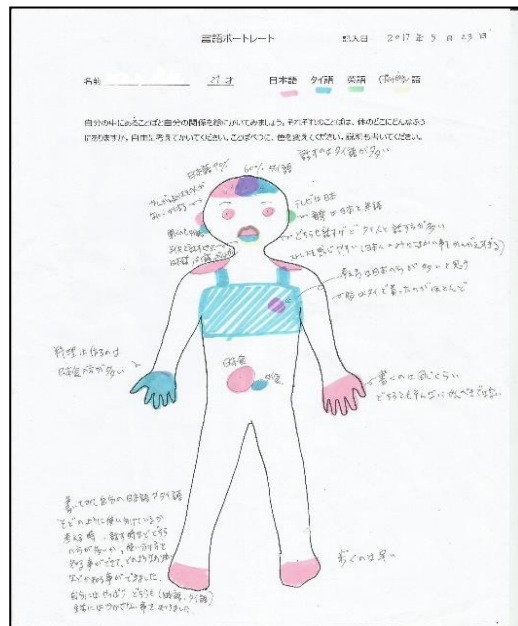
6. 言語ポートレートからみる現在のSさん

インタビューの最後に、言語ポートレートを書いてもらい、自分の体のどの部分にどのような言語が存在しているのかを客観的に見てもらった。

来タイ当初、タイ語が分からなかったSさんであるが、現在では、日本語もタイ語も分かることは、他の人よりも得だと話す。

言語ポートレートからは、タイ語と日本語のどちらも同じくらいの割合で使用していることが分かる。感想にも「やっぱり(タイ語、日本語)どちらも生活には欠かせないことを知りました」と書いている。

書き終えた後、これから子どもが大きくなって話すようになるとまたこの割合も変わってくるだろう、と話した。





### 語りから見えてきたもの

自分がダブルであることの誇りを持ち、大学で日本語を学ぶことにより現在の日本語能力の維持と向上を目指していることが明らかとなった。Sさんにとって、他の人よりもタイ語や日本語ができること、タイと日本の文化や習慣を理解していることは大きな自信であり、この自信があるからこそ自分の人生を肯定的に生きていると感じられる。

日本語の勉強は「楽だから」日本語科を選んだと話していたが、日本語能力維持のための努力は半端なものではない。「日本語が好き」とも話すように、Sさんにとっての日本語は「楽」ではなく「好き」なのだろうと考える。

### おわりに

インタビューを行うことでラームカムヘン大学のダブルの学生の背景を知ることができ、日本語の維持と向上を目的にラームカムヘン大学で日本語を勉強していることが分かった。また、教師として「ダブルだから日本語ができる」との思い込みはとても危険だということも強く感じた。日本人教師としては、ダブルの学生たちと日本語で日本やタイの話をし、少しでも心の支えとなれるのではないかと思う。特に、日本で教育を受けてタイへ来たダブルの学生にとっては、同じ教育を受けた者同士、同じような目線や価値観を持つ日本人教師と話すことで幾分安心を与えることができると感じた。

今後の課題としては、これまでにインタビューしてきた他のダブルの学生についてもまとめ、ダブルの学生がラームカムヘン大学に、また日本語教育に何を求めているのか、日本人教師はどのように関わり、どのような支援ができるのかを考えていきたい。

### 注<sup>2</sup> 外国人と日本人の親の間に生まれた人。

ハーフという言葉には半人前という意味も持っていることから、「ハーフと呼ばれるのは差別的だ」と、問題になった事がある。ダブルにはよりポジティブな意味が含まれている。

<sup>3</sup> タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会運営委員、第1回ダブルの大学生会「日本人なのに」「日本人だから」、

<http://d.hatena.ne.jp/jmherat/searchdiary?word=%2A%5B%A5%C0%A5%D6%A5%EB%A4%CE%C2%E7%B3%D8%C0%B8%B2%F1%5D,2016-07-08>

<sup>4</sup> 今までに住んでいた場所や言語の移動を表にしたもの。

<sup>5</sup> 現在、ラームカムヘン大学は1学期が7～10月、2学期が12～3月、S学期が4～5月の3学期制である。

<sup>6</sup> 体の中での言語の位置づけを見るためのもの。



#### 参考文献

- 川上郁雄 (2014) 「あなたはライフストーリーで何を語るのかー日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『リテラシーズ』14, pp. 11-27. くろしお出版
- 桜井厚 (2005) 「ライフストーリー・インタビューをはじめ」桜井厚、小林多寿子 (編) 『ライフストーリー・インタビューー質的研究入門』 pp. 11-61. せりか書房
- 三代純平 (2014) 「日本語教育におけるライフストーリー研究の現在ーその課題と可能性について」『リテラシーズ』14, pp. 1-10. くろしお出版
- 尾関史・深澤伸子・牛窪隆太 (2011) 「日本国外で成長する子どもたちにとっての日本語使用経験の意味ー子どもたちはどのように日本語と向き合ってきたのか」『リテラシーズ』9, pp. 11-20. くろしお出版